

【酸切】 〔45〕 痛切。(任昉、王文憲集序) 表啓酸切、義感三人神。(陳書、世祖九王、鄱陽王伯山傳) 以敍他鄉離別之意、辭甚酸切。

【酸然】 〔46〕 ●物すごいさま。物さびしいさま。(晉書、輕重甲) 今高杠柴池、東西南北不相睹、天酸然雨。(纂詁) 酸然猶淒然也。●心を痛めぬさま。(晉書、殷仲堪傳) 詔曰、卿去有日、使人酸然。(韻府引、陸游、詩) 平生知幾別、此別益酸然。

【酸素】 〔47〕 元素の一。無色無味無臭の氣體。他の元素とよく化合し、動植物體、物の燃焼等に缺くべからざるもの。

【酸楚】 〔48〕 悲しみ痛む。苦痛。悲痛。(李白、望木瓜山詩) 客心自酸楚、況對木瓜山。(范成大、桃花源詩) 山深風重鼻酸楚。

【酸足】 〔49〕 足をいためる。(淮南子、脩務訓) 且夫觀者莫不爲之損心酸足。

【酸奶】 〔50〕 suan' naip 牛乳を腐らせた飲料。酸味を帶び、蒙古人が飲用する。

【酸杖】 〔51〕 草の名。いたどり。虎杖の異稱。(本草、虎杖) 舜名、苦杖、大蟲杖、斑杖、酸杖。

【酸痛】 〔52〕 悲しみ痛む。(謝靈運、廬陵王誄) 發酸痛於仁詔、令寵贈於哀心。

【酸】 〔53〕 貞子書生。(西廬記、崔鷺驚夜聽琴雜劇) 來回顧影、文魔秀士、風欠酸丁、下士工夫。將一額頰十分掙。

【酸涕】 〔54〕 悲しみ泣く。(周易、牧守竟陵因遊西塔) 著三感說、詩) 哀得不酸涕、濕目以著詞。

【酸甜】 〔55〕 すい味とあまい味。(張衡、南都賦) 徐再思の作つた散曲。貴は酸齋、徐は甜齋と號するから名づく。

【酸甜樂府】 〔56〕 書名。二卷。元の貫雲石と。

【酸疼】 〔57〕 うづく。すきんすきんと痛む。(紅樓夢、十九回) 寶玉道、酸疼事小、睡出來的病大、我替備解問兒混過去了、就好了。

【酸桶】 〔58〕 果實の名。鹽穧子の異名。ぬるで。(本草、鹽穧子) 舜名、酸桶、藏器曰、蜀人謂之酸桶、云云、吳人謂之鹽穧。

【酸毒】 〔59〕 人を甚だ苦しめる。又、甚だ恨む。(後漢書、朱穆傳) 今、將軍結怨天下、更人酸毒、道路歎嗟。

【酸軟】 〔60〕 だるい。弱々しい。(紅樓夢、十回) 精神倦怠、四肢酸軟、據我看、這脈息、應當有這些症候、纔對。

【酸鼻】 〔61〕 鼻に痛みを感じ、涙を催すこと。(宋玉、高唐賦) 孤子寡婦、寒心酸鼻。(注) 善珠崖、義傳) 莫不爲酸鼻揮涕。(後漢書、公孫述傳) 一旦放兵縱火、聞之可爲酸鼻。

【酸風】 〔62〕 身に浸みる風。心を痛ませる風。(李賀、金銅仙人辭漢歌) 魏官牽車指千里、東關酸風射眸子。

【酸母】 〔63〕 葉草の名。●すかんばう。山大黃、酸模の異名。(本草、酸模) 舜名、山羊蹄、山大黃、殖蕪、酸母、葎、當藥、時珍曰、殖蕪、乃酸模之昔母草、同一名。●かたばみ。酢漿草の異名。(本草、酢漿草) 舜名、酸漿、三葉酸、三角酸、酸母、醋母、酸箕、鳩酸、雀兒酸、雀林草、小酸茅、赤孫施、轉酸模、又酸母之轉、皆以味而名、與三葉酸模同名。●かたばみ。酢漿草の異名。(本草、酸模) 舜名、山羊蹄、山大黃、殖蕪、酸母、葎、當藥、集解、弘景曰、一種極似山羊蹄而味酸、呼爲酸模、亦療瘡也。

【酸木】 〔64〕 草の名。孤桃の異名。(廣雅、釋草) 酸木、孤桃也。

【酸味】 〔65〕 ●すい味。(晉子、幼官) 味酸味、聽角聲。(注) つらいことくるしみ。(土屋鳳洲、海舟誠書生) 鮑人生酸味、知世態。

【酸迷】 〔66〕 草の名。酸漿(35)の異名。(詩、魏風、汾沮洳、言采其莫、疏) 陸璣疏曰、莫、葦大和箸、云云、其味酸而滑、始生可以爲羹、又可生食、五方通謂之酸迷。

【酸迷迷】 〔67〕 草の名。酸漿(35)の異名。(通俗編、草木、酸迷迷) 按、俗以酸漿草爲酸迷。

【酸與】 〔68〕 鳥の名。(山海經、北山經) 景山有鳥焉、云云、其狀如蛇，而足、名曰酸與。

【酸懶】 〔69〕 suan' lan' だる。●食物の一。(歸田錄) 京師食店賣酸懶者、皆大出牌榜於通衢、而俚俗昧於字法、轉酸從食、饅從館、有滑稽子謂人曰、彼家所賣酸餠、不知爲何物。

【酸餠氣】 〔70〕 餠の鍋えて酸味を帶びたもの。人が愚かで役に立たぬを嘲つていふ。(調膳編) 子瞻贈惠通詩、氣含蔬筍到公無、常語、人曰、頗解蔬筍語否、爲無酸餠氣。

【酸黃羹】 〔71〕 すいにら。(西廬記、崔鷺驚夜聽琴雜劇) 乾沙羹、寬片粉添些雜糧、酸黃羹、燶豆腐休調味。

【酸二柳】 〔72〕 suan' san' liu' 紫檀。

【酸枝木】 〔73〕 suan' chih' mu' 紫檀。

【酸主】 脾。●酸は五臟にあてはめれば脾を主るもの。(晉子、水地) 五味者何、曰、五臟酸主、脾、鹹主肺、辛主腎、苦主肝、甘主心。

【酸主】 脾。●酸は五臟にあてはめれば脾を主るもの。(晉子、水地) 五味者何、曰、五臟酸主、脾、鹹主肺、辛主腎、苦主肝、甘主心。

【酸梅湯】 〔74〕 砂糖湯の中に梅を入れた飲料。(燕京歲時記、酸梅湯) 酸梅湯、以酸梅、合冰糖、薑之、調以玫瑰、木樨冰水、其涼振齒。

【酸醃】 〔75〕 清代、秀才(8-24911-44)の異名。

【酸梅】 〔76〕 草の名。酸漿(35)の異名。(詩、魏風、汾沮洳、言采其莫、疏) 陸璣疏曰、莫、葦大和箸、云云、其味酸而滑、始生可以爲羹、又可生食、五方通謂之酸迷。

【酸溜溜】 〔77〕 氣取つたわら。氣取りすぎた。



(圖) 海經山經與酸

〔68〕

〔71〕

〔72〕

〔73〕

〔74〕

〔75〕

〔76〕

〔77〕

〔78〕

〔79〕

〔80〕

〔81〕

〔82〕

〔83〕

〔84〕

〔85〕

〔86〕

〔87〕

〔88〕

〔89〕

〔90〕

〔91〕

〔92〕

〔93〕

〔94〕

〔95〕

〔96〕

〔97〕

〔98〕

〔99〕

〔100〕

〔101〕

〔102〕

〔103〕

〔104〕

〔105〕

〔106〕

〔107〕

〔108〕

〔109〕

〔110〕

〔111〕

〔112〕

〔113〕

〔114〕

〔115〕

〔116〕

〔117〕

〔118〕

〔119〕

〔120〕

〔121〕

〔122〕

〔123〕

〔124〕

〔125〕

〔126〕

〔127〕

〔128〕

〔129〕

〔130〕

〔131〕

〔132〕

〔133〕

〔134〕

〔135〕

〔136〕

〔137〕

〔138〕

〔139〕

〔140〕

〔141〕

〔142〕

〔143〕

〔144〕

〔145〕

〔146〕

〔147〕

〔148〕

〔149〕

〔150〕

〔151〕

〔152〕

〔153〕

〔154〕

〔155〕

〔156〕

〔157〕

〔158〕

〔159〕

〔160〕

〔161〕

〔162〕

〔163〕

〔164〕

〔165〕

〔166〕

〔167〕

〔168〕

〔169〕

〔170〕

〔171〕

〔172〕

〔173〕

〔174〕

〔175〕

〔176〕

〔177〕

〔178〕

〔179〕

〔180〕

〔181〕

〔182〕

〔183〕

〔184〕

〔185〕

〔186〕

〔187〕

〔188〕

〔189〕

〔190〕

〔191〕

〔192〕

〔193〕

〔194〕

〔195〕

〔196〕

〔197〕

〔198〕

〔199〕

〔200〕

〔201〕

〔202〕

〔203〕

〔204〕

〔205〕

〔206〕

〔207〕

〔208〕

〔209〕

〔210〕

〔211〕

〔212〕

〔213〕

〔214〕

〔215〕

〔216〕

〔217〕

〔218〕

〔219〕

〔220〕

〔221〕

〔222〕

〔223〕

〔224〕

〔225〕

〔226〕

〔227〕

〔228〕

〔229〕

〔230〕

〔231〕

〔232〕

〔233〕